

-プログラムノート- 浅野 繁

F. シューベルト

- ロンド イ長調 D 951

Allegretto quasi Andantino 3/4 拍子

(速くというより少し急ぎぎみの歩調で)

いかにもシューベルトらしい歌謡で始まり繰り返される度の感情の移ろいが、
歌曲の世界を感じさせる。

A. B. A. C. A. B. A のロンド形式だが、中間部での交響的な響き、テーマ展開の様などからソナタ形式ともとれる。再現部の後、テーマがセカンドパートで歌われ最後にもう一度ファーストパートのユニゾンで現れ、そのままトリルで消え入る様に終わる、...

この曲がシューベルトの連弾曲最後の作品になった。

- 即興曲 D 935 (作品 142) より

第2番 Allegretto (やや速く) 変イ長調 3/4 拍子

即興曲はもう一つの「作品 90」「楽興の時」と並んでメロディの美しさなどシューベルトらしい魅力に溢れ、広く親しまれる作品が多い。

中でも今日演奏される第2番はアンコールなどでもよく弾かれ多くの愛好家になじみの曲である。

レントラーを思わせる舞曲風のスタイルだがトリオ部分の激しい転調部、そしてダ・カーポで冒頭の主題が戻る所は一瞬だが例え様もなく美しい。

第3番 Andante (歩く様な速さで) 変ロ長調 2/2 拍子

ピアノ学習者には殊の外馴染みのある曲である。

自作の「ロザムンデ」の旋律をテーマとした5つの変奏曲であるが、リズムの変化、大胆な転調、更には弦楽四重奏のような響きと、自由な発想に満ちている。シューベルトではあるが、ベートーヴェンの内面性が感じられる曲である。

前に学んだ曲を再び取り上げる場合、その時の情景が思い出されたり、習った事がこだわりになってしまう時がある。今日の演奏者も小学生の頃この曲を学習したと聞くと、今回、時を超えて同じ楽譜から何を感じ取りどんな情感を紡ぎ出してくれるか楽しみにしたい。

私がどうしてシューベルトに心惹かれるのか？

深い共感を覚えるもの、自ら音にしてみたいと思う作品は数多くないのが実情です。

おそらくシューベルトには私の心の琴線に触れる何か、、、まさに音楽があるのだと思います。

今日の2つの即興曲を通し、祈り、幼き日の自分と触れ合ってみたくと思います。(浅野純子)

L. v. ベートーヴェン

- ピアノソナタ 第32番 八短調 作品111

第1楽章 Maestoso-Allegro con brio ed appassionato

(堂々と威厳を持って) (快速に、生氣と情熱を持って)

強烈な音とリズムを持った減七の和音で始まる荘厳な序奏部は圧巻である。上昇する4度の旋律が Allegro 部を導き出す。主要テーマ、展開部のテーマ動機の展開、第2主題の優しさ等、何よりも余分なものを削ぎ落とし、凝縮され、生氣に溢れ情熱的な音楽は、作曲とピアノという楽器を知り尽くしたベートーヴェンそのものである。

第2楽章 Arietta: Adagio molto semplice e cantabile

(アリエッタ) (非常にゆっくりと、単純にそして歌うように)

作品111が最後のピアノソナタである事、かつ大変な高みにある音楽であることを知識としては知っていたが、正直聴いても凄い曲だなと思うばかりで特にこの第2楽章はよく分からなかった。

東日本大震災の後だろうか、Arietta (小さなアリア) をポツポツと弾き始めたのは、...

八長調の至って素朴な分かり易いメロディと時代を越えた様な和声使いが隠れた魅力になっている。

大まかに5つの変奏とコーダから成っているが、主題、又は主題モチーフがポリフォニックに、

リズムの分割を伴って有機的に進められる。分散和音で喜びを歌い上げた後、一旦静まり高音の

特徴的なトリルが現れる。5度音程による移行を経て再び主題旋律が原型で現れ歓喜の音楽を

奏する。再度 トリルに合わせ左トレモロを伴って主題の前半のみが歌われ、高音域からの下行音階の

後、祈りのように終わる。人間技とは思えない奇跡のような音楽である。

今日が初めての演奏となるが、ひたすら書いてあるように弾きたいと願うばかりである。

F. シューベルト

- デュオ「人生の嵐」イ短調 D 947

Allegro ma non troppo 2/2 拍子

(快速に、しかし過ぎないで)

幻想曲 へ短調 D 940 ロンド イ長調 D 951 と並ぶ最晩年の連弾曲傑作の一つ。

ソナタ形式(提示部、展開部、再現部、コーダ)で書かれているが、展開部開始の第1主題のへ短調は独創的であり、エピソード楽句の音楽的な充実度を考えるとロンド形式のようにも見えてくる。

いずれにしても、第1主題モチーフの有機的な発展、ミサ曲を思わせる美しさを持った第2主題、

転調の移り変わり、そして展開部に見られる対位法的書法はシンフォニックでもあり、壮大な

ソナタの第1楽章として書き始めたという説もうなづける。

Duo (デュオ)として遺されたこの曲は、シューベルトの死後12年の後に「人生の嵐」のタイトルで出版された。

31年の短い人生ながら、幼少期から天才と称されつつもベートーヴェンを師と仰ぎ、

時代を超えてひたすら音楽を求め続けた彼の人生が聞こえてくるようである。